

特集●貴司山治と〈占領・開拓〉の時代

貴司山治『維新前夜』と近代の超克

思想戦とアジア解放の幻

内藤由直

一 はじめに

本稿は、貴司山治の小説『維新前夜』⁽¹⁾と同時代の戦争及び〈近代の超克〉論との結節点を探り、本作品が戦時下の思想戦を扶翼するものであったことを明らかにする。

『維新前夜』は、幕末日本の乱世に取材した歴史小説であり、貴司山治の名声を高めた代表作である。この作品は、『読売新聞』紙上の初出連載が進むにつれて爆発的な人気を博し、数多くの読者を獲得した。それは掲載紙の売り上げを左右するものとなり、戦時下の用紙節減によって新聞連載が打ち切りとなったときには、読売新聞販売店が読者の減少を懸念して反対し、社長の正力松太郎を糾弾する騒ぎが起こったほどであった。⁽²⁾また、春陽堂から刊行された初刊本は、第四巻刊行時（一九四二年九月刊）に合わせて第一巻から第三巻が再版され、以後、奥付の記載に拠れば第四巻から第六巻（一九四三年九月刊）まで

を「一五〇〇〇部」、第七巻（一九四四年五月）を「二〇〇〇〇部」発行している。本作品は、貴司山治の創作活動の中で最も多くの読者を魅了した小説の一つであり、貴司を一躍、流行作家へと押し上げた傑作であった。

人口に膾炙した『維新前夜』であったが、しかし、作品に対する本格的な研究は未だ行われていない。当時の読者から強い支持を受けた小説であったにも関わらず、それが同時代においていかなる意味を持っていたのかはこれまで十分に追究されることなく、作品の分析は手付かずのままとなっているのである。

では、『維新前夜』は研究に値する作品ではないのかといえ、決してそのようなことはない。なぜなら、本作品は、戦争遂行を可能にした総力戦体制の中で、思想戦の一翼を担った戦時下の言説を支持したものであったと考えられるからだ。論述を先取りして具体的に言うならば、この作品は、大東亜戦争並びにその渦中で展開されていた〈近代の超克〉論と密接な関係



『維新前夜 第一卷』(春陽堂 1941 年) 伊藤嘉明・装画

を持つており、戦争の論理を作品として具現化するものであったと読むことができるのである。

『維新前夜』と〈近代の超克〉論との協働連関を前景化し、両者の連繫を把握していく作業には、二つの意義がある。まずは、『維新前夜』が戦時体制を支えた文学作品として看過でき

ない重要な小説であった事実を示すことができるはずである。そして、「不思議に思われるほど思想的には無内容である」(竹内好「六 近代の超克」『近代日本思想史講座Ⅶ』筑摩書房 一九五九年)と、その空疎さが指摘された戦時下の〈近代の超克〉論が同時代の文学表現に対して実際の効果を及ぼした議論であったことを提示することができるはずである。本稿は、作品と同時代批評との関係に焦点を当てることによって、これら二つの

側面を鮮明にし、『維新前夜』の歴史的位相を明らかにしていく。

二 通俗歴史小説の試み

『維新前夜』は、幕末の日本を舞台とした歴史小説である。物語は水戸藩の勤皇家である藤田東湖の暗殺未遂事件の場面から始まる。東湖の用心棒である神道無念流の達人、小谷虎之介は、そこで大奥を支配する歌橋の局から東湖暗殺を命じられた北辰一刀流免許皆伝の女剣士、千葉真葛を迎え撃つ。虎之介の圧倒的な強さの前に敗走した真葛は後日、虎之介と再会し、歌橋こそが天下の政道を乱す敵であると教えられ、虎之介の妻となつて共に東湖に仕える身となる。そして、虎之介と真葛は互いに協力し合い、東湖の思想を実現するために尊皇攘夷運動へと参画していくのである。

この虎之介と真葛の二人の主人公は作者の空想によって創り出された人物であるが、小説には東湖や歌橋に加えて桂小五郎や西郷吉之助(隆盛)、坂本龍馬など、実在の人物が数多く登場する。『維新前夜』は、尊皇攘夷思想と公武合体論の対立という維新前の歴史的状況を背景にして、事実と虚構を交えながら幕末の国難に立ち向かう人々を描き出し、在るべき日本の姿を形象化しようとするものであった。

日本の将来像を模索する物語が理想としたのは、主人公たちが依拠する尊皇攘夷思想に支えられた国家の姿である。例えば、

虎之介が真葛に対して師である東湖の思想を語って聞かせる場面では、日本の進む道が次のように示されている。

虎之介はおとろへた頬に微笑を浮べて、真葛を視た。／「藤田先生は、アメリカ合衆国の傲慢無礼を打ちこらすためには、まづ今の日本国を、上下を打つて一丸とした強力な国家に改造しなければならない、といふにあります。（中略）先生は今度のアメリカとの條約締結を、神州の国柄をはづかしめる一大失策、ご公儀がしでかした朝威失墜の醜業だと、痛憤なさつてゐるのです。」／「でも日本にはアメリカの黒船を撃ち攘うだけの武力の備へがないではありませんか？」／「それです。武備がないからといつて、おめ／＼屈服しなかつた相模太郎は、では国を破つたでせうか？ 元の軍船はたつた四艘ではなかつたのです。攻め入つてきた夷らは十余万です。太郎時宗は断乎としてこれを一蹴しました。世汗隆なきにあらず、正氣時に光りを放つ、と先生は歌つてをられます。北条時宗は正氣の一大光芒です。日本の国威をかゞやかし、皇風を六合に洽しました。この氣、この膽がなくて、どうして国家の生々發達がはかれませう。軟弱にして、たゞ事勿れ主義の今の幕閣には、たうてい国威發揚の政事は望めません。」『維新前夜 第一卷』春陽堂 一九四一年）

ここで描かれているように、黒船に象徴される西欧列強の脅威から日本を守り、天皇を中心とした挙国一致体制を実現していくことが、本作品全体を貫くテーマとなっている。創造された二人の主人公は、この理想を実現するために作品世界を縦横無尽に駆け回り、国内外の敵と刀を交わして戦っていくのである。

作者が抱いていた当初の構想によると、「『維新前夜』では開国直後の安政元年から慶応三年までの十四年間を取扱ふ」（貴司山治「あとがき」『維新前夜 第一卷』前掲）と述べられているように、ペリー再来のとき（一八五四年）から明治維新の前年（一八六七年）までが描かれる予定であった。しかし、物語は、安政四年（一八五七年）に關所を突破して江戸へ向かおうとする駐日総領事ハリスを真葛が襲撃する場面で閉じられている。戦後の再刊本においても、この後の物語が描かれることはなく、本作品は未完のままに擱筆された。

ところで、貴司山治が『維新前夜』の物語を構想し、執筆を開始したのは、連載が始まる約一年前のことであった。貴司は、一九三八年二月四日の日記に「実録小説といふことを二年前に自分が唱へたが、それを作品であらはず仕事として、（中略）けふ維新前より後に互る時代に取材した長い架空のストーリーリイを考案する」（貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』不出版 二〇一一年）と記している。実録文学の実践として、このときに案出された新たな物語が、『維新前夜』だったのである。⁽³⁾

組織的なプロレタリア文学運動が崩壊した後、貴司は実録文学の創造を提唱し、「大衆が現実を見る眼を養ひうる健全な大衆文学」（『実録文学の提唱』『読売新聞』一九三四年一月九日、一三日 朝刊）の勃興を目指していた。それは、「嘘の山にうづもれてゐる歴史をほりおこし、現実の見方、そのうつり動いて行つた方向と、われわれ自身のゐる現代へのつながり様」（同前）を大衆に向けて明快に、そして妙趣ある形で提供するための形式であると同時に、プロレタリア文学運動以来の大衆教化を目標とするものでもあった。⁴

貴司は転向に際して、プロレタリア文学理論から一旦離れて「新しいリアリズム」（『治維法の発展と作家の立場』『東京朝日新聞』一九三四年五月一〇日、一三日 朝刊）に立脚し、「より多くの現実の客観的眞実を反映して行く文学的方法」（同前）の確立を目指していた。そのリアリズムとは「現在の社会のもつとも大きな生活層の把握に立ち向ひ、大衆の生活の基礎の分析や、生活諸層間の関係を描きだし、その将来の発展を暗示する」（同前）ものとして考えられた。そして、この新しいリアリズムの実践こそが、実録文学という形式だったのである。貴司は、実録文学の概念について説明する中で次のように述べている。

それは実録とか実説とかの字を冠した従来のたとへば「実録仙代萩」といったものゝ意味とは全く違ふ。それは、歴史がのこした現実の意味をわかりやすくおしへる

リアリズム文学に沿つた一本の併行線である。それは文学者が文学の機能の一部を駆りて大衆の文化的向上に役立たうとする切なる願望、やむにやまれぬ時代的関心のあらはれたるべき仕事である。（『実録文学の提唱』前掲）

実録文学によつて貴司が企図していたのは、大衆の現実を見る眼を啓き、大衆自らがその現実の中に将来の文化的発展に繋がるモメントを見出すことであつた。この目的を達するためには、まず何よりも大衆に読まれる文学を書かなければならない。そのために貴司は、大衆に愛読される小説、とりわけ歴史小説の形式を採用し、そこで描かれる過去に現在を織り込み、歴史に仮託しながら目前にある現実の意味を描出しようとしたのである。これは、プロレタリア文学が「合法的に成立することが全く不可能」（『治維法の発展と作家の立場』前掲）となつた時代状況の中で、なお進歩的な文学的立場に立ち続けようとした貴司が辿り着いた窮余の一策であつた。

このような新しいリアリズムの実践としての実録文学を、作品として具現化しようと試みたのが『維新前夜』であつたが、しかし、戦時下という時代状況の中で、貴司が大衆に見せようとした現実自身を含めた往時のプロレタリア作家たちによつて活写された現実とは様相を異にするものであつた。貴司は、『維新前夜』の新聞連載を始めるに当たつて、次のように述べている。

ペリーの来航が導火線となつて燃え上つた国内革新の焰はあらゆる旧体制を打ち破つて維新を実現した。昭和維新の別名である新体制も単なる維新ではなく、二千六百年を貫く皇道精神への復古である。昭和維新の目的は凡ゆる重圧を押しつけて大東亜共栄圏を建設するにありそのための国内新体制は東洋新体制の基調となる。この大理想実現の原動力が常に唯一無二の皇道であり、御稜威である所以を作者はしばしば九十年前の黒船の渡来した時代に遡り史上実在の先覚志士を悉く捉へ来つて新体制下の同胞に説き語らんとするもので、作中妙齡覆面の主人公は暗に男子と化して狂瀾の殺陣を布き、時に卒然として舟中三絃を弄する風流の美女となり、毎日の紙上に感興と教訓の光閃を放ちつづけねばやまない。希くは徒らに興味の擒となつて作者汗血の真意を忘却するなからんことを！（「わが理念」『読売新聞』一九四〇年一月一三日 夕刊）

貴司が『維新前夜』という歴史物語を通して描き出そうとした現実、大東亜共栄圏建設の礎となる皇道精神であった。確かにこれは、戦時下という目前の現実を描出したと見ることはできる。だが、一方で、貴司が実録文学に見込んでいた大衆の文化的向上への寄与や自らの前衛的立場の維持とは大きくかけ離れた意味を表出するものであったとも言えるだろう。

貴司は、実録文学の概念と『維新前夜』のそうした隔たりを解消するために、新たな概念を創出した。それが、「通俗歴史小説」である。『維新前夜 第一巻』（前掲）の「はしがき」で貴司は、「一、この本は芸術として書かれる歴史小説とはちがふ。歴史上の人物の名が、架空の人物の名と、どこまでも入り乱れて繽紛をきはめるやうに書いてあるのは、少くともわが読者を史実の嘘からもぎはなし、歴史の真実を、その感情にうつたへて解明しようとの企てからである。／＼一、私は自分のこの仕事を通俗歴史小説と名づけよう」と述べている。歴史の真実を読者へ提示するという目的は、実録文学と通俗歴史小説に共通している。けれども、実録文学に込められていた転向作家の葛藤が、通俗歴史小説ではきれいに抜け落ちていくのである。つまり、通俗歴史小説という形式は、プロレタリア文学運動が崩壊し、転向者となつてもなお大衆の立場に立った創作活動の実践を模索していた貴司が戦時下において自己の思想と時代状況との隔たりを埋めようとした表現様式だったのである。そして、『維新前夜』は、その理を全うしようと試みた実作品であつたのだ。

では、通俗歴史小説の実践である『維新前夜』は、具体的にどのような表現を通して、いかなる歴史の真実を読者に伝えようとしたのか。

三 尊皇攘夷と大東亜戦争



「真葛と龍馬逢坂山中に試合の図」

玉井徳太郎・画

『維新前夜 第四巻』（春陽堂 1942 年） 口絵

『維新前夜』の物語において最も感興をそそられるのは、主人公である小谷虎之介たちが繰り広げる活劇である。彼らは物語の中で眼の前に立ち現れる幾人もの強敵と刀を交わしていくのだが、このとき、虎之介らが撃破するのは目前に迫る敵の存在だけではない。闘いによって蹴散らされるのは、敗者たちが担っていた思想そのものである。

例えば、虎之介が最初に闘った相手は、後に妻となる千葉真葛であった。幕末の剣士、千葉周作の娘である真葛は歌橋の刺客として暗躍し、攘夷を阻止して開国するという幕府の政策を実現するために、政敵である藤田東湖の命を狙っていた。しかし、東湖を守る虎之介との勝負に破れた真葛の内面には、闘いを切っ掛けとして葛藤が生じ始める。

真葛は前節で見たように、決闘の後、虎之介から東湖の尊皇

攘夷思想を教示されるが、一方で時の老中阿部正弘（伊勢守）より「攘夷論は、ご政道に責任のない書生論、いはゞ道聴途説でござる。今こそ祖法を抛つて国を開き、少くも向ふ五年の間に外国の軍艦、大砲、銃器の類を交易によつてどしどしとり入れ、日本国を面目一新しなければなりません。上下一致富国強兵の実をあげるのこそ根本の策、祖法を破つて祖法を守るこの変転の理がおわかりにならねばいけませんぞ」（『維新前夜 第一巻』前掲）と諭され煩悶する。真葛は、「阿部伊勢守は、今ではずみ分つきすゝんだ開国和親のお考へらしいわ。あれでは今にイギリスともロシアとも和親条約をして、すっかり日本を隅々まで開国するつもりらしいわ。ところがご隠居様も藤田先生も、水戸家では大へんな攘夷論でせう。あたし、開国と攘夷と、どつちがいののかよくわからないわ。虎之介さん、どう思召すかしら？」（同前）と、東湖に代表される攘夷の論理と幕府が推し進める開国の論理との間で揺れ動くのである。

真葛は開国と攘夷のどちらが正しいのかを見極めるため、島津斉彬の家来であった西郷吉之助を従えて東湖に論戦を挑む。ところが逆に、真葛は西郷とともに東湖から、幕府には最早、国難を打開する力のないことを説諭される。東湖は、真葛と西郷に向かって次のように叱咤する。

「西郷君、東照宮以来、譜代専断の御政道はペルリよつて打ち破られたのだ。」／東湖は炯々と眼を光らせて、

／「総登城一件は、老中以下の役々のみならず、諸国諸大名一人として国難打開にあたる力のないことを明白にした！ そのための人材登用、幕閣補強、富国強兵、みなこれ大事去つたあとの彌縫策、いいか、西郷君、賢明方の策は、いはゞ破れ衣のつゞくり話さ。」（中略）「諸大名の衆議を以て、国の綻びがつゞくれたかね？」西郷君、各藩の意見は、

家老、側役の賢良をすぐつた脳味噌の総仕舞ひだ。それが、一向何の役にも立たんぢやないか。真に国を救ふ者は果して何人ぞ！ 君等だ、君等だぞ。六十余州の隅々に真に民に接し、民と苦楽を俱にしてゐる足輕どもの起つべき時が眼の前に迫つてきたのだ。君等は何を以て起つか？ 賢才を以てか？ 否、正気だ！ 一身を天皇に捧げまつる至大至剛の気を以て起て！ それでなければ天下の負荷に耐へんぞ。」（同前）

西郷とともに東湖から一喝された真葛は、以後、迷いを断ち切り、虎之介とともに東湖の尊皇攘夷思想を実現するために命を懸けていく。二人は、井伊直弼や水野忠央ら開国派の幕臣が擁する剣士たちと対峙し、圧倒的な剣の腕前で敵を駆逐し、開国思想そのものの息の根を絶つていくのだ。

小説の中では、開国を目指す幕府側の剣士たちがその思想とともに葬り去られていくだけでなく、虎之介と真葛が信ずる尊皇攘夷思想の正当性が強調されていく。例を挙げれば、東湖の

門下生である桜任蔵が老中阿部正弘の懐刀である青江武之進と虎之介に語つて聞かせる次のような論断は、外敵を排し、天皇を中心とした国家を建設することこそが日本の進む正しい道であることを力説している。

日本人は、いざ国難といふ時には、この国が神武以来いや天孫以来の神の国であるといふ気高い思ひに必ず眼醒める。わしはこれを清浄の精神とよんでゐる。外難に向つて猛然と蹶起する日本人の心は、夷どもの汚穢を払つて、清浄国土を欣求する固有の精神に外ならない。しかも勇氣と果敢の源泉となるこの精神のよりどころは神の裔たる清浄の天子をいたゞくところにある。いや、おの／＼が天子の矛となり、楯とならんとの観念を結定すれば、富貴もいらぬ、立身もかへりみぬといふ捨身の勇猛心にみたされるのぢや。その翕まつた力が国を救ひ、国をたてなほす。しかし、徳川家に対して日本人の心にはそのやうな最高の奉公の念は生じない。ここはしたがつて、自己一身の榮達を希ふ策士や、中途半端な政治家があつまる。しかし、今の日本はさうした人々の手にはおへないむつかしい時世にさしかゝつてゐる、国難の解決をせまられてゐる。総力の發揮が求められてゐる。ぜひと清浄天子の御代にかへし奉ることが第一要件なのぢや。

こうした尊皇攘夷の大義は作中で繰り返し語られており、他にも梅田雲浜の口を借りて、「皇国の正気を大いにのぶるためには、唯今、何よりもわが国の四周を脅してゐる英、米、仏、露を一挙に退けるにある。たとへ一戦を交へてわが方が破れても、断乎たる攘夷の精神力こそ万代不易の国の基となる。この精神力を培はずして皇国興隆の道はござらん。故に今日の気運は、幕府をして一旦諸外国と結んだ開港條約を破棄せしめ、夷狄らを退散せしめるにある」(『維新前夜 第四巻』春陽堂 一九四二年)と説明されている。このように『維新前夜』は、尊皇攘夷論と公武合体論との思想的対立を前景化した上で、尊皇攘夷派の論理が国是としての正しさを持つことを主張するのである。

ここで、本作品が通俗歴史小説の実践であり、歴史に埋もれた真実を現在において浮上させるものとして構想されたことを想起するならば、藤田東湖や桜田蔵たち水戸学者の思想や、それに一身を抛つ虎之介や真葛の行動が読者に喚起する「真実」の輪郭が見えてくるはずである。

それは、対英米戦争を遂行する戦時下の日本において、疑うことのできない真実であり、同時代において共約可能な論理でもあった。『維新前夜』が刊行されていた渦中において、例えば高須芳次郎は水戸学の再興を説き、「水戸学は、一切の文化、一切の学問を皇道のもとに統一し、日本精神の力によつて、之

を強化すべきことを青年に教へる。(中略) 故に大東亜戦においても、水戸学精神の再生を要するわけで、現代青年はこの心意気のもとに、目的完遂に向ひ、猛獅の如く困苦の丘を飛び越え、艱難の地を踏破してぐん／＼突き進みいつ迄も／＼屈撓せぬ旺盛な精神力を随所、到所に十分發揮しなくてはならぬ」(『水戸学と青年』潮文閣 一九四二年)と述べている。小説の中で東湖たち水戸学者が語っていた思想こそ、大東亜戦争を遂行する力であると言うのである。また、大川周明も、「後に謂はゆる日本の大陸政策となりて現れ、遂に今日の大東亜共栄圏の建設にまで具体化された理念は、実に明治維新の前夜に於て、夙くも当時の先覚者によつて把握されて居たのである」(『大東亜秩序建設』第一書房 一九四三年)と述べ、明治維新を準備した尊皇攘夷こそが「近代日本の国民的統一の最も重要な基礎理念」(同前)であることを強調している。つまり、『維新前夜』が表現した真実とは、大東亜戦争を遂行する日本の精神的基盤の起源であり、それが現在へ繋がっているという歴史的連続性の認識なのである。

『維新前夜』は、幕末に醸成された尊皇攘夷思想の正当性を現時へ伝えることで、大東亜戦争の必然性を揚言する通俗歴史小説であったとひとまずは評価することができるだろう。とはいえ、本作品は、戦争という時代状況に阿諛追従しただけの小説ではない。時代に影響された凡作ではなく、次節に見るように、むしろ想像力の及ぶ範囲を拡張しながら時代を牽引しよう

とした作品だったのである。

四 アジア解放と〈近代の超克〉論

『維新前夜』が描き出したのは、尊皇攘夷思想を国家形成の原理とする日本の姿であった。これは、作品が執筆された戦時下において、鮮烈なりアリテイを持つ「真実」でもあった。しかし、本作品は、時局への迎合を余儀なくされた作品ではない。この小説は、大東亜戦争の理念を文学化し、日本の戦争目的を読者大衆へ向けて具現化する役割を積極的に担ったのである。それでは、作品の中で日本の戦争目的はどのように描き出されているのか。

戦争の大義が表出しているのは、小説の中で繰り返し表現されている、世界における日本の指導的立場の宣揚においてであると考えられる。例えばそれは、桜任蔵が小谷虎之介に海の向こうの敵国アメリカを指し示し、世界の広さを教える次のような場面である。

桜任蔵はふところからうすつべらな一冊の書物を取り出して、虎之介に朗読させるのである。それは平田篤胤の『霊の真柱』であった。そこには、地球の概念が最初に書いてあった。／虎之介のやうな当代の青年にとつて、世界が球形をなしてゐるといふやうな説は、不思議な事柄であつた。

その球面に数十の国々がある。しかし神が造つた国はたつた一つ日本だけである。その他の国々は直接神が造つたものではなく、カスのやうな物質でできてゐる。そこに住む民族もだからしたがつて下素である。ひとり神造の国に生れた清浄日本人のみが、世界の民族と国家を救済し、神の幸福をわけ与へ八紘をもつて一字となすところの大業をなしとげるのである。／——さういふ意味のことが、烈しい口調を以て書かれてゐた。そこでは神の観念、清浄の観念が国土に対する猛烈な愛情と一体になつてゐた。そして、その純粹な愛国の観念は、やがて対外的には攘夷の声となり、対内的には武家政治、封建社会を打ちこはして天照大神の延長たる朝廷による皇政の実現を呼ぶ声となつたのである。(『維新前夜 第二巻』前掲)

ここで言挙げされる八紘一字は周知のように、大東亜戦争の基本理念であり、大東亜共栄圏の建設という国策決定の根拠となつたものだ。⁵⁾『維新前夜』では、この八紘一字の標語が反復され、その実現が希求される。桜任蔵は西郷吉之助に対しても、次のように述べている。

「薩摩一国ぐらゐのことは朝飯前ぢや。」／「君が英雄たらんには、すべからく日本第一等の英雄となりたまへ！」／「はつ……」／「いや、少くとも東洋の英雄たらずんば、



『鴨東夜合之図』 玉井徳太郎・画
『維新前夜 第四巻』口絵

日本国の役にも立つまい！」／西郷は大きな眼を見すゑたまゝあつけにとられて桜先生をみつめてゐる。／「君は藤田先生を通じてすでに少しは水戸学を窺つたらう。義公以来の水戸学は漢土にいふ王道の教へである。我が朝の古学の道から言つても同じことぢや。君子の分を正し、王道を翼戴して治国平天下を現するのが臣子の道である。この道を東洋全体に及ぼし、世界に光被させるのが天業の結びである。八紘一字とはすめらぎの威徳を以て、世界平和を顕現する謂ひぢや。各国土、各民族おの／＼居る処にしたがつてその業に安んじ、相喰まず相争はず、共々栄えをいたす、これが八紘一字の謂れである！」（『維新前夜 第一巻』前掲）

虎之介と西郷、それぞれへ向けて語られた桜任蔵の言葉に見られるように、作中で揚言される八紘一字の理念は、それを唯一成し遂げられる日本の固有性とともにあつたが、同時に東洋全体及び世界へと敷衍されるべきものでもあつた。これは、大東亜共栄圏の建設を担う日本の特殊性とともに、日本主導で形成される新秩序が独り日本だけのものではなくアジア全体を利する普遍性を持つものであることを示唆していると読むことができる。

では、日本の特殊性とアジアの普遍性を接続するものは何か。『維新前夜』の物語において、それは、平木重蔵、児玉大二郎という二人の長州藩士の活躍を通して描かれている。平木と児玉は、プチャーチンに乗せたロシア戦艦ディアナ号を襲撃した武士であつた。彼らは、下田に停泊していたディアナ号に総勢五名で夜襲をかけたのだが、兵員五〇〇名を擁するディアナ号に乗り込んだ途端に撃退され、海中へ突き落とされた後、行方不明となつていた。ところが二人は、漂流中に第二次アヘン戦争の引き金となるアロー号に助けられ、水夫となつてそのまま清国へと航海する。広東の港で清の官憲による臨検に抵抗した二人は、太平天国の楊秀成に剣の腕前を買われ、太平軍に加わることとなる。

無論、これは荒唐無稽な空想物語であるが、重要なのは彼らが外国軍隊に加わり率先して敵と闘うに至つた動機である。作品の中では、二人が日本人として清国の人々と共闘する理由が

次のように語られている。

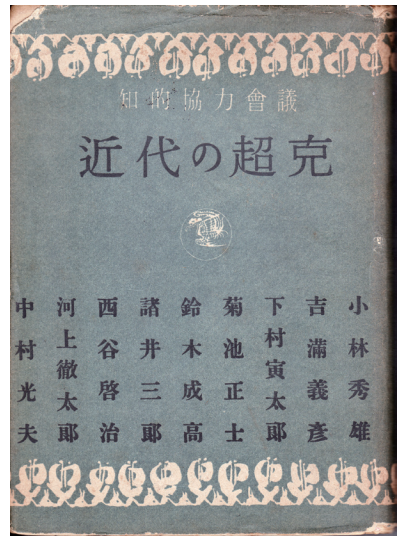
孫先生は鉄格子に顔をさし入れるやうにして、児玉の顔をみた。そしていった。／「しかし玉大人、お前は中国人ではないさうぢやないか。日本人だときいたが、はたしてさうか？」／「さうです、わしは日本人です！」／「ほう、日本人がなぜ中国のために、イギリス人と合戦をしたのぢや？」／「日本人は、中国人と同じ東洋人だ。だから助けただ。」（『維新前夜 第七巻』春陽堂 一九四四年）

児玉はこの後、イギリス軍の捕虜となりインドへと連行されていくのだが、その艦船の中で火夫であるインド人のバハルに向かって次のようにも叫ぶ。

「さうだ。おれたちはアメリカ人やイギリス人に屈した幕府をたふして、もつと強い国家をつくりあげ、わが国を辱めたあいつらをうち攘ふつもりなのだ！」／「恐ろしい考へだ。恐ろしい男だ！ お前のやうな日本人が、お前の国にそんなにたくさんあるとは思へない。」／児玉はバハルの肩を打つて、どなつた。／「ばかなことをいへ！ おれたち攘夷党は、日本の国中に、毎日のやうにふえてきてゐる。何千人、何万人あるかわからない。おれたちの仲間、アメリカ人やイギリス人に屈したわが幕府をまづたふさう

としてゐる。わしは、はからずも海外にでて、広東をみた。そして今はカルカッタをみた。洋鬼がいかに凶悪な人種かといふことを知つた。清国人や印度人は日本人と結束しなければ、とてもかれらにかなはない。バハル、わしはつくづくさう思つた。今ここでわしがお前たちの復讐のために、どこまでも加勢してやらう。たて、バハル！ このスター号から脱出して、カルカッタに行かう。戦つてゐるお前たちの仲間に加はつて、イギリス人をたふせ。勇気をだせ！」（同前）

ここでは、日本と中国、そしてインドが直面している西洋からの支配が問題となつてゐる。三国はいずれも、アメリカやイギリスから植民地化される危機的状況に置かれており、西洋の脅威に晒された東洋の国なのである。この脅威を撥ね除けるために、東洋の国家は一体となつて西洋に打ち勝たねばならない。即ち、「攘夷」の実現が必要なのである。広東から逃れ広州に流れてきた平木もまた李鴻章を眼の前にして、「わが日本も、今イギリスやアメリカのために、曾てない辱めと苦しみをうけてゐます。わたくしはたまたま中国に漂流して、清国人が同じ洋鬼のために悩まされてゐるのを見る時、同憤同起の好みを以つて戦はざるをえないのです」（同前）と述べる。日本と中国、インドは同じ東洋の国家として同一の苦しみを味わつてゐるのであり、その困苦に対する義憤を分有することで、共に戦うこ



『近代の超克』（創元社 1943 年）

とができるのだ。そして、神国日本の武士たちは国外においても攘夷のために命を省みず身を挺して戦うのであり、その行動は西洋の支配から東洋を解放するための道義として描き出されるのである。『維新前夜』は、日本の攘夷と東洋の攘夷を同心円上に重ね合わせることで、アジアから西洋を駆逐するという共通の目的を描き出す。幕末の日本で形成された攘夷の思想が、アジアの普遍的原理として表出されるのだ。

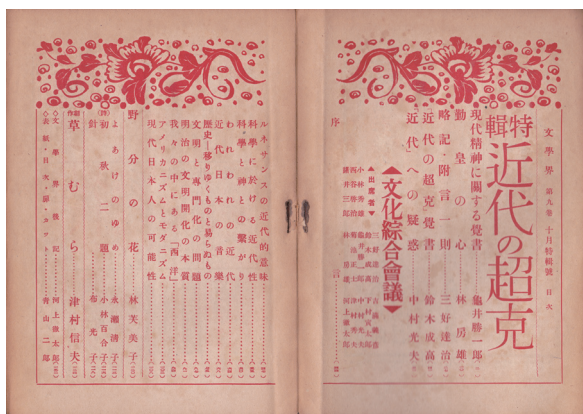
日本の力によってアジアから西洋を排除することは、現実に行う大東亜戦争の目的そのものであった。対英米戦争の宣戦布告には、「米英両国ハ残存政權ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ与国ヲ誘ヒ帝国ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝国ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ経済断交ヲ敢テシ帝国

ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ（中略）帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破砕スルノ外ナキナリ」（『詔書』『官報』号外 一九四一年二月八日）と記されている。また、西谷啓治は、アジア各国の民族的自覚を覚醒し「大東亜圏といふものを自発的・主体的に担うやうな力たらしめるといふことが、大東亜圏における日本の特殊の使命」（高坂正顯・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高『世界史的立場と日本』中央公論社 一九四三年）であると述べている。『維新前夜』は、歴史に空想を織り込み、その物語を享受する者の想像力を掻き立てることによって、読者の現前で遂行されている戦争の大義、そして、アジアにおける日本の指導的役割を形象化するのである。

このような作品の有り様は、戦時下という時代状況に追随したというよりも、戦争を推し進める思想戦の実践であったと考えることができる。思想戦とは、総力戦体制の下で文化活動を戦争に動員することである。高山岩男は「今度の戦争は要するに秩序の転換戦であり、世界観の転換戦なのだから、そして世界観といふものが思想の事柄である以上、今度の総力戦は当然その根底に於て「思想戦」といふ性格をもつてゐる」（同前）と、戦争の一面として世界観が激突する思想戦の局面を重視し、「対外対内にわたつて思想を新しく転換させるといふところに、今度の戦争の本当の意味がある」（同前）と主張した。思想戦の目的は高山が述べるように、国内外の思想を改め精神活動の総力を戦争へ投入することにあつたが、そのためには「どうし

ても国内に残存する文化面における米英的なものを根絶しなればならない」(情報局「思想戦と文化」『週報』一九四二年一〇月二八日)と考えられた。

戦時下において思想戦を翼賛し、文化面における米英的なものの根絶を理論化したのは、〈近代の超克〉論である。例えば、亀井勝一郎は〈近代の超克〉座談会へ提出した論文の中で、近代において西洋文化が日本文化に浸潤してきたことを指弾し、「現在我々の戦ひつゝある戦争は、対外的には英米勢力の覆滅であるが、内的にいへば近代文明がもたらしたかゝる精神の疾病の根本治療である。



『特輯近代の超克』(『文学界』1942年10月)

る。これは聖戦の両面であつて、いづれに怠慢であつても戦争は不具となるであらう」(『現代精神に関する覚書』『文学界』一九四二年一〇月)と述べている。同様に津村秀夫も、「アメリカニズムが将来の東亜文化圏の建設にあつて如何に見え

ざる障害となるか」(『何を破るべきか』『文学界』一九四二年九月)とアメリカ文化が日本文化へ及ぼす悪弊を懸念し、「このアメリカニズムを如何に克服するかといふ課題」(同前)の解決を提起する。

こうした反西洋の論理は、『維新前夜』の中でも、激烈な表現となつて示されている。尊皇攘夷派の僧である月性和尚が登場し、宴席で幫間が踊る唐人踊りに怒り狂い、「今の唐人踊りがけしからんのだ。わしは、いやしくも神州日本から外夷を駆逐するために、一身を犠牲にして働いてをる。少くも京洛の地に生をうけて、いやしい幫間とはいへ、日本人のくせに、唐人の真似をするとは何だ! 攘夷とは、異人どもを国内から追ひだすだけではない。日本人の心の中から、アメリカや、イギリスの真似をするのを追ひだすことだ。さあ刀をよこせ!」(『維新前夜 第四巻』前掲)と叫びながら幫間に斬りかかろうとする場面がそれである。また、上梓された物語の最終部において、千葉真葛が駐日総領事ハリスを襲撃する場面は象徴的だ。「ハリスの駕籠が、松明の光りのかげにゆれながら、大きな杉の木立の下の道を通りすぎようとした時であつた。／杉の太木のうしろにかくれてゐた一人の武士が、抜き身をひつさげて踊りだした。／「洋夷、斬奸だ!」／同時にその武士の刀が、ハリスの駕籠の扉を刺し貫いた」(『維新前夜 第七巻』前掲)とあるように、西洋を代表するハリスを悪そのものとして斬り殺そうとするのである。

五 未完の物語

戦時下の〈近代の超克〉論と『維新前夜』の共振は、それらのみに止まらない。例えば、「近代的なものがヨーロッパ的なものであるといふ、そのヨーロッパといふのは、ヨーロッパだけではない、もつと世界的なものといふ意味のヨーロッパなんです、それでヨーロッパの世界支配と言つて居るわけですが、さういふヨーロッパの世界支配といふものを超克するために現在大東亜戦争が戦はれて居ります。さういふのもやはり一つの近代の超克といふことである」（文化綜合会議 近代の超克 第一日『文学界』一九四二年一〇月）という鈴木成高の発言や、「大東亜の建設は、わが国にとつて植民地の獲得といふやうなことを意味してはならないのは勿論であり、また世界の新秩序の樹立といふことも正義の秩序の樹立の謂である」（西谷啓治「近代の超克」私論『文学界』一九四二年九月）といった西谷啓治の議論は、前述した長州藩士、平木重蔵・児玉大二郎の信念と共鳴するものであるだろう。西洋による支配秩序を超克し、日本を中心としたオルタナティブな新秩序を構築していくことこそ、〈近代の超克〉論と『維新前夜』が共有する思想の核心なのである。

このように、『維新前夜』は、同時代の〈近代の超克〉論と協働連関を持ち、思想戦に加担した作品であつたと考えることができる。それは、単なる時局迎合の大衆小説などではなく、大東亜戦争の理念を形象化し、それを真実として提示すること、読者の思想転換にコミットした作品であつたのである。

以上のように本稿では、『維新前夜』が通俗歴史小説という形式を採用しながら、大東亜戦争の大義を表出していたことを明らかにしてきた。また、作品が、同時代の〈近代の超克〉論と共鳴しながら、思想戦を積極的に扶翼するものであつたことも確認してきた。

竹内好は戦後、「近代の超克」の最大の遺産は、私の見るところでは、それが戦争とファシズムのイデオロギイであつたことにはなくて、戦争とファシズムのイデオロギイにすらなりえなかつたこと、思想形成を志して思想喪失を結果したことにある」（六 近代の超克前掲）と述べている。竹内は、〈近代の超克〉論に同時代的アクチュアリティはなかつたと言うのだが、本稿がこれまで考察してきたように、当該議論は戦時下の文学作品とも緊密な関係を持っていたのであり、決して無力な言説ではなかつた。それは、『維新前夜』がその証左であるように、確かに「知識人たちの戦争体制翼賛に『理論的』根拠づけを与える所以となつた」（廣松渉『近代の超克』論 講談社 一九八九年）議論であつたのだ。

しかし、近代の超克は、大東亜戦争の目的と同じく、完遂されることなく未完に終わった。ヨーロッパ秩序に取って代わる新たな世界観が現出することはなかつたのである。同様に、『維

新前夜』も未完のままに擱筆され、アジア解放の物語は幻となった。全てが、中途のままに放擲され、その後が書き継がれることはなかったのである。

未完のままに残された物語は、何を招来させるだろうか。例えば後年、『攘夷論』は幕末の日本の苦悩の表現であった。当時のすべての知識人が考えなやみ考えぬいた一つの結論である。(中略) 英米仏蘭の艦隊が西方よりせまり、さらにプチャーチンの露国艦隊が北方に現われた時、だれか「攘夷」を思わないうであろうか」(林房雄『大東亜戦争肯定論』番町書房 一九六四年)と幕末の攘夷思想が見直され、その延長線上に大東亜戦争を把握することで「日本が実行した「東亜百年戦争」は、この植民主義、征服主義から脱出するための努力であり、奮闘であった」(林房雄『続・大東亜戦争肯定論』番町書房 一九六五年)と維新前夜から敗戦に至る近代日本の歴史過程が再評価されたように、解決を見なかった課題は、過去の議論の反復として幾度も現前に立ち現れることになるだろう。持ち越された未解決の問題は常に既に、今に回帰する機会を窺っているのだ。

その際、『維新前夜』と『近代の超克』論が描き出した課題を、『軍国主義支配体制の「総力戦」の有機的な一部分たる「思想戦」の一翼をなしつつ、近代的、民主主義的な思想体系や生活的諸要求の絶滅のために行われた思想的カンパニアであった』(小田切秀雄『近代の超克』論について『文学』一九五八年四月)と全否定するだけでは、それらの表現が生み出されてきた問題の根

源を見誤ってしまうことになる。

鈴木成高が明確に述べていたように、近代の超克とは、「政治においてはデモクラシーの超克であり、経済においては資本主義の超克であり、思想においては自由主義の超克」(『近代の超克』覚書『文学界』一九四二年一〇月)の問題であった。尊皇攘夷と戦争という手段によってこれらを超克しようとした方法を肯ずることは決してできないが、依然として世界を秩序づけている近代の機制が無謬の正義であるわけではない。それは、『秩序』を行商する列強」(マルクス「支那印度論」『マルクスエングルス全集第六巻』改造社 一九二八年) によって強いられた枠組みに過ぎないものだ。デモクラシーや資本主義、自由主義の不正義に直面するとき、近代は再び軋轢を生じ、再審に付されることとなるだろう。そのとき、『維新前夜』と『近代の超克』論が辿り着いた地点を見極めることは、現在を乗り越えていく方法を模索する大きな手掛かりとなるはずである。

注

- (1) 初出は、『維新前夜』(『読売新聞』一九四〇年一月二六日夕刊) 一九四一年一〇月一日 夕刊、全二四回連載。初刊は、『維新前夜』(春陽堂 一九四一年) 一九四四年、全七巻。戦後に『新編維新前夜』(春陽堂 一九五六年、全三巻)として再刊された。初出、初刊、再刊は、全て未完に終わっている。初出連載中には、

映画化もされた（渡辺邦男監督『維新前夜』東宝 一九四一年七月）。初出、初刊の挿絵・口絵は玉井徳太郎、初刊の装幀は伊藤嘉朔、再刊の装幀は宮永岳彦がそれぞれが担当した（貴司山治研究会編『貴司山治研究』不二出版 二〇一一年、一四二頁に初刊本の装幀画家として玉井徳太郎の名前を掲げてゐるのは間違ひである）。なお、本稿における作品本文の引用は初刊本に拠り、作品名を『維新前夜』と二重鍵で括る表記で統一した。

- (2) 貴司山治日記「一九四一年九月二七日」（貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』不二出版 二〇一一年）の記述を参照。貴司はこの中で、「打切りによつて販売店が騒いで社長が困惑してしまふほどの評判を『維新前夜』が作り出したとすれば、作者としては大した成功のわけである」と記している。また、新聞連載の最終回では、「前回紙上で、未完のまゝ筆をとめる旨を書いたら『やめるな』『つづけてくれ』といふ諸君の投書が、ひきもきらない」（『維新前夜 補遺』『読売新聞』一九四一年一〇月一日夕刊）と、連載継続を求める読者の声が数多く寄せられたことを記している。

- (3) 『維新前夜』執筆時の詳細については、拙稿「戦時下の生活と通俗歴史小説の大成」（貴司山治研究会編『貴司山治研究』前掲）を参照されたい。

- (4) 貴司山治が提起した「実録文学」の意義については、鳥木圭太「転向の時代」（貴司山治研究会編『貴司山治研究』前掲）を参照。また、芸術大衆化論争と貴司の関わりについては、和田崇『蟹工船』の読めない労働者（『立命館文学』二〇〇九年十二月）を参照した。

- (5) 一九四〇年七月二六日、第二次近衛内閣において、「皇国ノ国是

ハ八紘ヲ一宇トスル肇国ノ大精神ニ基キ世界平和ノ確立ヲ招来スルコトヲ以テ根本トシ先ツ皇国ヲ核心トシ日滿支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亜ノ新秩序ヲ建設スルニ在リノ之カ為皇国自ラ速ニ新事態ニ即応スル不拔ノ国家態勢ヲ確立シ国家ノ総力ヲ挙ケテ右国是ノ具現ニ邁進ス」（『基本国策要綱』情報局編『時局の重大性』内閣印刷局 一九四一年）と、大東亜新秩序建設を国家の基本政策とすることが決定され、それを表す標語として八紘一宇の用語が使用された。

- (6) 情報局「思想戦と文化」『週報』一九四二年一〇月二八日）を参照。ここでは、「今や大東亜戦争はいよ／＼長期戦の段階に突入したが、これを光榮ある勝利の彼岸に戦ひ抜くためには、日本の文化もまた総力をあげて戦線に動員されなければならない。即ち、酔乎たる日本文化の確立、宣揚こそ、大東亜戦の興廃を決する鍵の一つである。その日本文化の確立とは、すべて、皇国の道に則り、国体を明徴にすることから発するのであつて、深く日本世界觀に徹することこそ、あらゆる文化活動の根本であることを銘記すべきであらう」と記されている。

附記

本文や資料の引用に際し、漢字は新字に改めルビ・傍点等は全て省略した。引用文中の「／」は原文での改行を示す。また、引用・参考資料名の副題は省略した。